

奪われた共生の言葉 障害者なき対話に市川沙央さんは思う

2025 年 9 月 12 日 5 時 00 分



小説家の市川沙央さん＝諫山卓弥撮影

寄稿・市川沙央さん 小説家

「対話でさぐる 共生の未来」

昨春秋に東京ミッドタウン八重洲カンファレンスで開催された朝日新聞社主催の一大イベント「朝日地球会議 2024」のテーマです。SNS でフォローする作家さんの登壇告知ポストから興味を持ち、イベント内容を公式サイトでチェックした私は、とても驚いてしまいました。〔誰ひとり取り残さず、すべての人が暮らしやすい持続可能な地球と社会について、みなさまとともに考えていく「朝日地球会議」〕。輝かしい理念に続いて紹介される 70 人近い登壇者は、すべて元気そうな人ばかり。障害当事者や家族あるいは支援者の立場の人すら、一人もいないのです。高校生・大学生ゲストの 10 人を含めれば、登壇者合計 76 人中のゼロ。20 以上を数えるプログラム(セッション)のテーマにも、障害者に関するものは一つもないようです。では会場参加者のアクセシビリティはどうなっているのかと、事務局に問い合わせてみたところ、各セッションに手話通訳も同時字幕も用意されていない旨のお返事をいただきました。

均質的な知性および移動や会話に困難のない健常な身体を持った人だけを 76 人も集めて、聴衆に聞こえや認知のアクセシビリティを保障する意志も感じられない「対話でさぐる 共生の未来」。朝日新聞は、いったい誰と、何と共生するつもりなんだろう。

.....クマ？

「共生」は、地球環境や生物、異文化などさまざまな文脈で使われる言葉ではありますが、「共生社会」を検索すれば分かるように、我が国ではまず第一義に障害者の包摂を考えるための言葉だったはずです。とりわけ日本は「相模原障害者施設殺傷事件」という凄惨な障害者大量殺戮(さつりく)事件が起きた国なのです。あの事件以後の我が国で「共生」の語を使うことの意味と義務について、「朝日地球会議 2024」の企画立案者と承認者の頭には一片も浮かぶことがなかったというなら、残念な思いを通り越して、何かもっと極めて深刻な問題が〈私〉とあなたがたの間に横たわっているのじゃないか。そんな疑いが湧いてくるのです。〈私〉とは一市民でありまた一障害者としてこの社会に暮らし、ついでに言えば朝日新聞デジタルを購読する一人でもある市川沙央という私のことです。

アクセシビリティに関して無理な要求はしていません。同時期に東京国際フォーラムで行われていた東京都主催の「だれもが文化でつながる国際会議」では、手話通訳・同時字幕、パンフレットのテキストデータ提供があるだけでなく、それらアクセシビリティサポートの情報が公式サイトトップに明記されています。ただでさえ障害者はどこへ行こうとしても下調べと事前連絡を課され〈問い合わせ疲れ〉をしています。そもそもドアが開いているかどうか分からない場所に、必要もないのにわざわざ行ってみようとは思わないでしょう。クローズドな健常者ファーストの場を作っておいて、あたかもサポートのニーズが存在しないように見せかける、そのどこが「対話でさぐる 共生の未来」なのでしょう。重箱の隅をつつくようですが「朝日地球会議」公式 X は、8 月末現在で投稿する画像に ALT(代替テキスト)を付けてすらいませんね。

誤解のないように言っておきます。私は障害者への配慮の不足を批判しているのではない。

「共生」という語をめぐる思考の不徹底を問うているのです。

「共生」をめぐる思考の不徹底

(字幕は付きませんがその代わり)各セッションの内容は後日、朝日新聞紙面や朝日新聞デジタルでご紹介予定です——と事務局から教えていただいたので、抄録記事を読みました。

私は朝日新聞の現状認識に対して、なお疑問を深めざるを得ませんでした。朝日新聞が新語を作成し力を入れている「8 がけ社会」.....社会を支える現役世代が今の 8 割になり、様々な業種で人手不足が深刻化する社会危機。この問題意識に関連して設定された朝日地球会議の議題はどれも、今この社会で障害者が経験させられている現実とあまりにも乖離(かいり)している。朝日新聞の関心は、生産力とサービスが縮小して服装や嗜好(しこう)品の選択肢が減ってしまう未来を受け入れて楽しめるかどうか、ということにあるらしい。

朝日新聞にとって、知識人を集めて語り合うべき不安とは、嗜好品の選択肢の多いか少ないか、そしてそれを楽しめるか楽しめないかくらいのものでしょうか。在宅の寝たきりの人がもう十年以

上も前から、訪問入浴のスタッフが集まらず今週はお風呂に入れるかどうか分からない、という綱渡りの生活をしているのに？

マイノリティの訴える困難や課題が、マジョリティの関心事にいつのまにかすり替えられ、小さく弱い声がかき消されてしまうのは、非常によくあることです。マイノリティの運動の篡奪(さんだつ)、などとも呼ばれています。しかしよりによって「共生」という言葉を篡奪するとは。障害者を対話(セッション)から排除し、人手不足が及ぼす今日明日の生活の不安、生存権すらおぼつかないかもしれない未来への危機感を、健常者の感覚で嗜好品の選択肢の問題に矮小(わいしょう)化してしまうとは、あまりにも恥ずべき篡奪だと思いませんか。

持続可能な地球と社会——SDGs。気候変動、自然災害、環境破壊、パンデミック、AI、戦争、食糧危機、少子高齢化、いいでしょう、いいでしょう。大きな、そして必然的なテーマでしょう。しかし、これら情勢の変化によってネガティブな影響を必ず先に受けるのは(朝日新聞に対して釈迦に説法な気もしますが)弱者、特に身体的弱者です。なのになぜ身体的弱者を抜きにそれらを語るのだろうか。

繰り返します。他の国ならいざ知らず、日本は「相模原障害者施設殺傷事件」という、稀にみる障害者憎悪犯罪が起きた国なのです。あの日、2016年7月26日に、何人が殺され、何人が傷を負ったか、覚えておられますか。それをまっとうに記憶していたら、「共生」の語を身体的弱者への想像力なしに、無思考に、ただの意識高い woke のためのキラキラワードに貶(おとし)めてしまう「朝日地球会議 2024」のセッション構成はありえなかったのではないですか？ あるいはもっと深刻な認識の問題——【そうは言っても、われわれの「一般社会」とヤマユリエンみたいな障害者の世界は、ぜんぜん別のことだからなあ.....】——こうした心理の断絶が、私とあなたがたの間には横たわっているのかもしれない。これが、本寄稿で私があなたがたに伝えたかったことです。

コロナ禍で起きたこと

「共生」の語をもってしても乗り越えられない断絶。

特にコロナ禍の渦中で障害者たちに降りかかった苦難。医療の受けづらさ、医療者による差別、面会制限、世間の無関心、正常化する社会から置き去りにされていくこと。パラレルワールドに残される、と、ある重度障害者の親御さんは言っていました(『増補新版 コロナ禍で障害のある子をもつ親たちが体験していること』生活書院)。コロナ禍を境にして、もともとあった断絶はもっと露骨に、あからさまになりながら深まったと感じている人たちがいます。社会はすでに、私たちを切り捨ててることを選んで、そうしても痛まない心をコロナ禍という非常時の経験から手に入れたのではないかと。

私自身は楽天家のうえ日本社会をどこか堅固に信頼しているので今まであまりそういうふうには考えなかったのですが、「朝日地球会議 2024」の構成を見て、「ああ、.....そうなのかもしれない」と、初めて思いました。日本に身体障害者は人口の 3.5%程度いるとされ、76 人なら 2、3 人は交ざらなければ不自然になります。にもかかわらず、あのクオリティーペーパー朝日新聞の考える「共生」からも障害者は、どんな障害者であっても——コミュニケーションに問題がなく楽しくお喋(しゃべ)りできる車椅子ユーザーですらもラインナップに入れてもらえないレベルで徹底的に排除されるのだから。もはや、多様性のかたちだけ揃(そろ)えて参加させときましたというアリバイを作る気さえないのだろう。

つまり「8 がけ社会」にも順応して生き残れる人間だけが生き残ればいいという、これは宣言なのだろう、と思いました。

朝日新聞デジタルを「8 がけ社会」のキーワードで検索しても障害者の不安に取材した記事はありませんので、この確信は間違いではないはずです。365 日ほとんど家の中に閉じこもっている私のところにだって障害者の苦境の情報は届くのです。足で稼ぐ新聞記者の目と耳にもっと多くの情報が入っていないわけがない。とすれば、情報と関心事の取捨選択と優先順位に何らかのバイアスがあるのでしょう。自分と同じ属性、似た経験、自分が共感できる課題、聞きやすい声、話しやすい人。すべてその逆にある障害者はいつものように、いないことにされ、「共生」の輪からも消された。私にはもう、未来に期待する気力が残っていません。

市川沙央さん

いちかわ・さおう 1979 年生まれ。幼少期に全身の筋力が低下する難病「先天性ミオパチー」と診断され、14 歳から人工呼吸器を使う。2023 年 3 月、早大人間科学部通信教育課程を卒業し、卒業論文「障害者表象と現実社会の相互影響について」が小野梓記念学術賞を受ける。2023 年 7 月、デビュー作の小説「ハンチバック」が第 169 回芥川賞に選ばれた。近刊に「女の子の背骨」。

「共生」への取り組み強化 市川沙央さんの朝日地球会議への指摘受け

市川沙央さんからいただいたご指摘への朝日新聞社の受け止めと、朝日地球会議をより開かれたものにするための取り組みを説明します。



鈴木江理子 (国士舘大学教授=移民政策)

2025 年 9 月 12 日 10 時 35 分 投稿

【視点】

研究者として「共生」を語り、現場にもかかわってきた者として、市川沙央さんの言葉は、とても重い。

多様な属性をもつ人びとの参画・参加、当事者（という言葉自体が不適切かもしれないが）の視点、対話の重要性、といった言葉を使い、「誰ひとり取り残さず、すべての人が暮らしやすい社会」を目指してきたつもりだったが、障害をもつ人びとの存在が抜け落ちていたことに気づかされ、愕然としている。

日本語以外を母語とする参加者に対する通訳や翻訳には配慮してきたものの、手話通訳や同時字幕には思いが至らなかった。会場を選ぶ際にも、交通アクセスや予算を考慮しても、車椅子ユーザーのアクセシビリティを検討したこともなかった。

「未来に期待する気力が残っていません」という言葉で寄稿文を締めている市川さんが、同様の思いを味わわされている障害をもつ人びとやその家族が、未来に期待をもてるためにはどうしたらよいのか、しっかりと受けとめ、行動に移したい。



富永京子（立命館大学准教授＝社会運動論）

2025 年 9 月 12 日 15 時 7 分 投稿

【視点】

極めて重要な指摘であり、朝日新聞社はもちろん、朝日地球会議に過去に登壇したにもかかわらず、指摘された点に全く気づかなかった自分にも向けられた批判だと感じています。「自分と同じ属性、似た経験、自分が共感できる課題……」といったバイアスの中にいるすべての関係者（登壇者含む）が聞くべき言葉だと思います。

さらに、このような「欧米の有名知識人を招聘し、日本の有名知識人と対談させる」会議を大々的に掲げることそのものが、いったい誰に対してどのような「未来」への思考を提供するのか、それは本当に「共生」や「対話」を提起しうるものなのか……ということも今一度考える時期にあると思います。

朝日地球会議が掲げている「共生」や「対話」は、当該ホームページを開くとすぐさま出てくる豪華な登壇者たちが発する、多くの人に聞かれることを予め保証された安全圏の言葉より、今回市川さんが提起してくださったような、周縁化された、消された、声が聞かれない、という諦めに直面しつつも、その中で紡がれた言葉から生まれるものなのではないでしょうか。



板倉龍（科学雑誌 **Newton** 編集部長）

2025 年 9 月 12 日 16 時 44 分 投稿

【視点】

市川沙央さんの寄稿文を、朝から繰り返して読んでいます。「対話でさぐる 共生の未来」を掲げた昨年の「朝日地球会議 2024」の 1 セッションに登壇し、コーディネーターを務めた一人として、指摘の点にまったく思いが至らなかった自分を情けなく思っています。事務局との打ち合わせでも、登壇者・視聴者の年齢層やジェンダーのバランスなどは議題に上りながら、障害をもつ方にもしっかり届く対話になっているかどうかの検討がすっかり抜け落ちていたことに、今日まで気がつくことができませんでした。市川さんのご指摘とご批判を重く受け止めます。科学雑誌 Newton としても、アクセシビリティの改善を進めていきます。



福原麻希

（医療ジャーナリスト・介護福祉士）2025 年 9 月 12 日 21 時 0 分 投稿

【視点】

市川沙央さんの寄稿文を拝見後、「朝日地球会議 2025」のホームページを拝見し、大変驚いた。**市川さんのメッセージがイベント企画者に、まったく伝わっていない**と感じた。市川さんは「共生」の言葉に含まれる現代社会における現状と課題の指摘、さらに提案を含めたメッセージを熱を込めて伝えようとしているにもかかわらず、今年の地球会議 2025 のセッションにも障害や障害のある人に関わるテーマは入っていない。どんなテーマを取り上げればいいかわからなかったのか。市川さんと語り合う場、あるいは、企画コーディネーターを市川さんをお願いすればよかったのではないかと。「すでに企画立案して市川さんをお願いしたが、断られてしまったんだよ」ということか。寄稿文中の【「一般社会」とヤマユリエンみたいな障害者の世界は、ぜんぜん別のことだからなあ……】と、むしろ避けたのか。今年の地球会議のホームページには「共生」の代わりに「共存」という言葉が使われていた。私は取材を通じて、障害のある人のもっとも大きな不安は「社会的な孤立」と感じている。障害は社会の側にある「障害の社会モデル」の考え方が浸透しているとは言い難い日常に

において、みなさん、排除される、あるいは、存在がなかったようにされることにとても敏感になっている。また、障害のある子どもの親は、明日もお子さんを守っていけるかどうかに不安を抱える。合理的配慮や介護サービスの提供機会は増えているが、日常的な「健康と笑顔を持ち続ける生活」「当たり前で社会の一員で居続けられる安心」を求めている。そして、現代社会には障害や障害のある人に対する「希望」も見える。もっとも大きな希望は(株)ヘラルボニー(本社岩手県)が発信する知的障害のあるアーティストのデザイン商品の数々だ。知的障害のある人の特徴的習慣の同じ行動を繰り返すことを強みとして、それをデザイン化し、世界でも多くの人々が欲しいと感じる商品に仕立て上げた視点の違い、発想の転換には脱帽する。地球規模で、障害や障害のある人の未来について語り合うセッションは、もっと生活の足元から生まれてくるのではないか。そして、私も「共生」という言葉を篡奪しないよう留意しながら、今後も取材や記事執筆等が続けていく。

本田由紀

(東京大学大学院教育学研究科教授)

2025年9月13日8時25分 投稿

【視点】

社会には無数の属性カテゴリーが存在し、大半のカテゴリーには量的な偏り(マジョリティ／マイノリティ)および有利不利が伴っている。「DEI」や「共生」という理念を打ち捨てたところには人が人を貪る地獄しかないことは確かだとしても、それらの理念を実現しようすることは、カテゴリーの無限さに即した果てしない課題となる。インターセクショナル리티の観点も加えれば、さらに課題は複雑化する。たとえば、DEI推進を掲げている某組織は、主な取り組みとしてジェンダーと障害を重視している。それに対して、たとえば「出身階層が不利な男性は無視するのか」「地方出身者への支援はしないのか」といった不満が寄せられる。その組織はこれらの声を見れば偽善的となり、対応しようとするならば多数の順列組み合わせの中で何にどう対処するかが問題となる。しかも常に、有利なマジョリティから「逆差別」という憎悪を向けられがちである。そうした「DEI」や「共生」という理念に伴う難しさを直視した上でなお真摯に取り組むという腹の括り方をどれほどできているか。難しさを痛感して自分だけ生き残れば良いと理念を投げ捨てたところに社会の参政党化が生じる、すでに生じている。